

# 奄美の風だより

発行・編集：奄美自然体験活動推進協議会

NO. 16

(春号： 4)

2004. 4. 1

A N C : News Letter



新緑に満ちあふれた山並



「オオシマウツギ」

野も里も新緑の季節となりました。風にふかれて小枝がゆれると若葉独特の香が周りに漂ってきます。多くの常緑樹や落葉樹が新芽を出している中で、奄美フォレストポリスの林道沿いにはアマシバやオオシマウツギの白い花が満開に咲いていました。里ではトベラの花が咲き乱れています。

春は繁殖期とあって、小鳥たちのさえずりもピーピーと、いつもより一段と大きな声を響かているように感じます。また、旅鳥を見かける時期でもあり、ムクドリが群れをなして餌を探している姿を目にしました。

センターにはしばらくの間、巣から出て道路でカラスにおそわれていたルリカケスの雛を保護しています。保護した頃はおとなしかったのですが、最近は食事時間が近づくとギャーギャーと鳴いて催促するようになってきました。また、箱から飛び出して机の上にとまったり、事務所の中をちろちろと歩く元気も出てきました。そろそろ自然へ飛び立って行く時期が来たようです。

暖かくなると山や海へと出掛けがちですが、時には水の流れを聞きながら川の観察へ出掛けるのはいかがでしょうか。じっくり観察してみると、川の中にもいろんな生きものを発見できます。

# 協議会活動報告

**講演会 「奄美の森の現状－外来種や分断化がもたらしたこと」**

**日時:平成16年3月20日(土)午後2:00～4:30**

**場所:振興会館(奄美文化センター)2階会議室**

**講師:石田 健(東京大学大学院 農学生命科学研究科 助教授)**

**亙 悠哉(東京大学大学院 農学生命科学研究科 博士課程)**

**前園泰徳(九州大学大学院 理学府生物学専攻 日本学術振興会特別研究員)**

講演会の様子

3月20日(土)に名瀬市の振興会館2階会議室で「奄美の森の現状－外来種や分断化がもたらしたこと」と題して、奄美の森の生態系を研究している石田健さん、亙悠哉さん、前園泰徳さんの3氏による講演会が行われました。この講演会は名瀬市が開催している「環境フェア」の初日に名瀬市、センターとの共催で行われたものです。

まず初めに石田さんが「奄美大島の森のしくみと生態学者のとりのくみ」と題して話され、生物が森の中で担っている役割(何が何を食べているか、何が何に食べられているか)や森の仕組み理解することが大切だと講演されました。

亙さんは「マングースの影響－今、奄美大島の動物たちに何が起きているのか?」と題して、中央林道で研究された結果について、スライドを使いながらマングースが多く侵入している地域と少ない地域での生物の状況の違いについて説明されました。多く侵入している地域ではアマミノクロウサギやアマミヤマシギなどが減少していることや、局所的に絶滅している生物もいることを話され、マングースなど外来種の駆除事業の必要性を訴えました。

前園さんは「奄美の在来生物を脅かすもの－外来生物と林道整備の影響」と題し、奄美の在来種を脅かすクマネズミの話の他、奄美は世界的に注目されている固有種が多く「奄美の自然は存在そのものに価値がある」と話されました。そして地元の人々の自然への関心が足りないことを強調されていました。奄美の自然へもっと関心をもつ必要性を感じた講演会でした。



石田さん



亙さん



前園さん



# 新聞記事

# 地域紹介

## 伊仙町

### ・伊仙町の自然の特徴

周りを山と海に囲まれ、緑ゆたかな森も多く残っています。特に、町中部にある水源の中部用水を含む義名山の森一帯は、多くの希少動物が生息しています。遺跡を見ながら自然散策してみるのも一興ではないでしょうか。

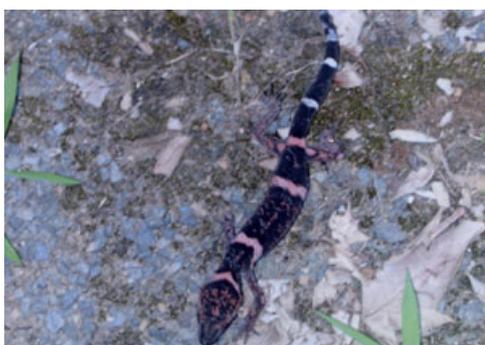
### ・コースの説明

伊仙町役場〈町道を上る〉→ 義名山運動公園 → カムイヤキ池  
→ カムイヤキ遺跡（第2支郡）

（ 義名山の森 ）



イボイモリ



オビトカゲモドキ



散策コース

このコースで見られる主な野生生物			
アマミアラカシ	スダジイ	リュウキュウマツ	リュウキュウエノキ
イボイモリ	アマミハナサキガエル	ミズカマキリ	コウロクヤモリ
	オビトカゲモドキ		

# 身近な生きもの情報

## 野生の生きもの観察日記

### 『春の自然日記：渡りの時期に備えて』

ヒカンザクラの花も終わり、黄緑色のスダジイの新芽が芽吹いてきました。常緑の奄美の森が1年で最も明るく見える季節が到来しました。純白の花を咲かせたアマミセイシカは、緑の森に彩りを添えてくれます。早朝の森にはオオトラツグミやアカヒゲのさえずりが響き渡り、不思議なイシカワガエルの声も沢から聞こえてきます。奄美の森が少しずつですが賑やかになってきています。

春と言えば渡りのシーズンです。この自然日記には“渡り”という言葉がよく登場しますが、これは繁殖地と越冬地のちがう鳥達が、春と秋にそれらの地点を行き来することです。大まかに春の渡りは南の越冬地から北の繁殖地へ移動し、秋の渡りはその逆になります。これから奄美にやってくる鳥達は、奄美で産卵し、子育てをします。この“渡り→子育て”という鳥達の営みの中で、私達が気を付けたいことが2つあります。

まず以前の自然日記（vol.11）でも紹介しましたが、建物への衝突の防止です。特に役場や学校といった公共の建物は、採光を良くするために大きな窓が南北に設置されていることが多いです。鳥の目には透明なガラス窓は見えづらいので、バードセーバーを貼って鳥に『ここには壁があります。通り抜けられませんよ。』と教えてあげて下さい（右写真）。



無事に繁殖地に着き、子育てを経てヒナは巣立っていきます。

“巣立ち”と聞くと完全に親の手を離れて独立すると想像しがちですが、中には巣立ちの後も親に餌をもらいながら、独り立ちに向けて訓練する鳥もいます。この時に起きやすいのが“誤認保護”です。まだ上手く飛べずに地面にいるヒナを見つけると、『迷子かな?』と思って連れて帰ってしまうことがよくあります。でも、一見迷子に見えるヒナのそばにはちゃんと親がいます。親の姿が見えないのは、人間を恐れて近付けないからです。もし



連れ帰っても、人間が鳥のヒナに野外で生きていく術（飛び方や餌の取り方、危険の回避法など）を教えることは不可能に近く、また無断で野鳥を飼うことは法律違反（鳥獣保護法）でもあります。特にケガをしていない鳥のヒナを見つけた場合は、その場を離れてそっとしておくのが最善策です。もし猫やカラスが近くにいて心配な時は、近くの木々の枝や茂みなどに移すと

襲われずに安心です。また、もし間違えて保護されたヒナを見つけたら、できるだけ早く発見した場所に戻してあげて下さい。誤認保護～放鳥への時間が短い程、親との再会の可能性が高くなります。センターでも先日ルリカケスのヒナが持ち込まれましたが、特にケガがなかったので放鳥を試みました。この時は保護されてから放鳥までが1日以内と短かったので、無事に親鳥との再会ができました（左；保護されたヒナ、右；放鳥場所）。善意で“保護”したつもりが、結果として“誘拐”となってしまうように暖かく見守ってあげて下さい。（センター 中村）



# 情報マップ 地図

# 春にみられる野生生物

※参考文献：図鑑奄美の野鳥：琉球孤野山の花

【アマシバ】 分布：奄美大島以南

低地～山地の斜面下地に多い常緑低木。葉柄は2～3cm。白色の小さい花を多数つける。果実は卵状つぼ形で長さ約4cm、緑熟する。和名は、若葉を噛むと甘味があることに由来する。



「トベラ」 分布：太平洋側は岩手県以南・日本海側は新潟県以南

海岸崖地～内陸部まで生える雄雌異株の常緑低木。葉は枝先にやや輪生状につく。花は白色でのちに淡黄色になり芳香がある。和名は株全体に悪臭があり、節分に魔除けとして枝葉を家の扉に挟んだことに由来する。葉はシャリンバイに似るが、質が柔らかく、葉をもむと悪臭があるので区別できる。



「ヤツガシラ」 ブッポウソウ目 ヤツガスラ科 全長26cm

名前のように頭に大きな冠羽をもっていて、普通は折りたたんでいるが、興奮したりすると冠羽を立てる。くちばしは細長くて下に曲がっている。体は赤色がかった淡い黄褐色で、翼と尾に黒色と白色の模様がある。草地や畑、芝生などで、昆虫や地中にいるミミズやセミの幼虫などを掘り出して食べる。主に旅鳥として全国に渡来するが、数は少ない。奄美へも旅鳥として春先に渡来するが、夏に観察されることもある。



鳴き声：ポポ、ポポポッ、など。

記録時期：2月～4月、7月、8月、

## 編集後記

新年度の始まりでお忙しい頃と思います。  
センター前の公園が整備されて、芝生も青々と生えてきました。公園内のウォーキングコースを歩いている人を見かけるようになりました。車に気を使うことなく、ゆっくり歩くことができるおすすめコースです。

**編集・発行：奄美自然体験活動推進協議会事務局**

□ 〒894-3192

鹿児島県大島郡大和村大和浜100

大和村役場 企画財政課

TEL：0997-57-2111

□ (連絡・書類等送付先)

〒894-3104

鹿児島県大島郡大和村思勝字腰ノ畑551

奄美野生生物保護センター内

TEL：0997-55-8620

FAX：0997-55-8621

